



TITLE:

京大広報 No. 694

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

---

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 694. 京大広報  
2013, 694: 4013-4028

ISSUE DATE:

2013-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196379>

RIGHT:



# 京大広報

No. 694

2013.11



第3回日独6大学長会議にて、共同声明署名を行う6大学長  
—関連記事 本文4016ページ—

## 目次

学問の自由と組織改革について 大学改革担当副学長 村中 孝史	4014
〈大学の動き〉	
松本総長、三嶋理事・副学長、吉川理事・副学長、 教職員一行が第3回日独6大学長会議に参加	4016
京都大学春秋講義(平成25年度秋季講義)を開催	4017
京都大学と国連環境計画(UNEP)が学术交流協定 を締結	4017
〈部局の動き〉	
寄附講座・寄附研究部門の更新	4018
基礎物理学研究所創立60周年記念シンポジウム・ 講演会・式典・祝賀会を挙行	4019
〈寸言〉	
ウルトラトレイルという世界 原 良和	4020
〈随想〉	
白昼夢 名誉教授 河合 隆裕	4021

〈洛書〉	
「押さば押せ、引かば押せ」 鈴木 実	4022
〈話題〉	
総合博物館がベトナム・ハノイで国際シンポ ジウムを開催	4023
日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ 地域における地球環境学連携拠点の形成」 第1回シンポジウムを開催	4024
花山天文台特別公開ウィークと野外コンサート を実施	4025
平成25年度総長杯(卓球大会)を開催	4026
「アジア太平洋における男女共同参画推進官・ リーダーセミナー」(国立女性教育会館)一行が 女性研究者支援センターを視察	4026
教育学研究科附属臨床教育実践研究センター 公開講座「成人生活への子ども時代の経験の 影響」を開催	4027
〈計報〉	4028

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 学問の自由と組織改革について

大学改革担当副学長 村中 孝史

学問の自由は憲法23条によって保障される基本的人権である。また、大学の自治は学問の自由の内実をなすと伝統的に解されており、その具体的内容として、人事、施設管理および学生管理等に関する自治が含まれるとされる。大学にこうした自治が認められるのは、大学の目的が学問の探究にあり、学問の発展には研究者の自由な発想が必要不可欠だからである。

ところで、現代の学問には多額の資金が必要となるため、国が、学問や高等教育の発展のために必要な経費の多くを負担している。その結果、国の財政支出の変化によって、探究すべき学問領域の選択を含め、大学は大きな影響を受けることとなる。

たしかに、学問の自由や大学の自治は、一般に市民的自由として位置付けられ、学問の探究に対する国家の不当な干渉を排除するためのものとして理解されてきた。京大事件<sup>(※)</sup>をはじめ、学問の自由や大学の自治の確立を求める本学の歩みも、このような文脈で展開されてきたものである。しかし、学問の探究に多額の資金が必要となった現在、学問が研究者の自由な発想に基づいてこそ、その真価を発揮することを考えると、国は財政支出にあたっても、大学の自治に十分配慮する必要がある。

他方、自由や自治には当然に責任が伴う。とりわけ、国民が負担する租税から多額の資金の交付を受けている以上、その資金を研究・教育の発展のために適切かつ有効に活用することは、自治を任された大学が国民に対して負うべき重大な責務である。大学がこのような責務を真摯に果たさなければ、大学に対する国民の信頼は失われ、大学の自治の存立基盤が損なわれてしまう。

たしかに、学問における真理の探究は、時として、国民の多数の意見に抗してでも貫徹される必要があ



る。これが、学問の自由、そして大学の自治の真髄である。しかし、このような学問の本質について広く国民の理解を得ることは、決して容易なことではない。この現実を、我々大学人はよく理解する

必要がある。学問の自由や大学の自治といった理念を唱えるだけでは、厳しい経済・財政状況下にあつて、身勝手な既得権益の主張と受け取られる危険がある。そのような誤解を招かないよう、大学は、国民に対して、できる限りわかりやすく学問の現状を伝え、また、大学が学問研究と高等教育の発展を真に支えていることを理解してもらう必要がある。そのために、大学は、たとえ自らにとって厳しいものであるとしても、必要な決定を自らの手で行うことができる能力、すなわち「自治」の能力を有することを示さなければならない。

本学では、これまで部局ごとの自治を基本とした組織運営を行ってきた。この運営方法は、部局の権限と責任を明確なものとすることで、部局単位で解決可能な問題に関しては比較的うまく機能する。しかし、本学が現在直面しているのは、もはや部局単位で解決できる問題だけに留まらない。

学問が研究者の自由な発想に基づいて発展するものであるならば、大学は、研究者が自由に研究を行えるよう、学問の発展に応じてその対象領域を変化させてゆく必要がある。既存の学問領域から新たな学問領域が生まれ、転換が図られていくという、学問の新陳代謝が行われなければ、学問は停滞する。また、現代社会が直面する課題は、大学に対して、既存の枠組みを超えた学問分野の創設を要請している。本学でも、各種ユニットや博士課程教育リーディ

ングプログラムなど、既存の部局を超えた取り組みがなされているが、これらの積み重ねの先には、既存の研究科の組み換え等も視野に入ってくるであろう。

このような課題に応えるためには組織再編が不可欠であるが、その際、従来の部局自治の考え方がかえって足枷となりかねないという事実を直視しなければならない。部局自治が当該部局への責任に基づくものである以上、自部局の利益を優先することは当然であり、ここに全学的視点がしばしば欠如することともいわば必然である。これを組織再編にそのまま当てはめるならば、およそどの部局も自部局に「不利」と思える再編案に賛成するはずはない。どの部局も、自らの教育・研究ミッションこそが、最重要であると主張する。しかし、客観的に見れば、すべてが最重要ということはある得ず、限られた条件の中で、取捨選択をしつつ組織の新陳代謝を図る必要がある。これをするためには、組織の存廃を含む組織再編に関しては、全学的な視点が考慮されるような仕組みを導入するしかない。

このような仕組みは、決して部局自治の基本を否定するものであってはならない。部局は配当された定員と予算に基づき、自律的な運営を保障される必要がある。教育・研究はそれを実施する教員により自律的に運営されてこそ、その真価を発揮する。また、部局の存廃を含む再編についても、当該部局の意見は尊重されるべきである。しかし、その決定は、全学的な見地から行えるようにしなければならない。

それでは、具体的にどのように仕組みが考えられるのであろうか。本学が独立の法人である以上、当然、本学が自ら決めるべきことであり、また、その決め方についても本学独自に考えるしかない。新たな方法を導入しても、それがうまく機能しなければ、結局、適切な組織再編は行えない。したがって、この仕組みの構築が、本学にとって喫緊の課題である。

提案されている組織改革案によれば、教育研究組

織とは相対的に独立した学系を創設することとされている。学系だけで教育研究組織のあり方を決めるものではないが、定員は学系に配当される、教育研究組織と学系が協議しながら組織再編を進めることとなる。教育研究組織が部局だとすれば、部局単独で組織再編を決定することは難しいということになる。もっとも、学系と教育研究組織の構成員は大幅に重なるわけであるから、学系を設けただけで組織再編が進むとも予想できない。そこで、関連する学系、学域、全学の将来構想にかかわる委員会の機能が重要となる。各学系・教育研究組織は、全学的な視野に立って練られた将来構想を踏まえつつ、それぞれの将来像を検討する必要がある。

このような仕組みで、本学が組織再編を進められるかは、結局のところ、その運用にかかっており、さらに言えば、本学の将来を構想しようとする教員の資質と意識にかかっている。学問分野は広大で、すべてを俯瞰できる者などいないが、なるべく広い範囲の学問分野を俯瞰できる人材を育て、学問の発展方向を見定め、本学の舵取りを担ってもらえるようにする必要がある。財政的な制約から、すべての学問分野を網羅できない以上、本学は本学として重視する分野を決める必要がある。この作業は、本学のみならず、わが国の学問のあり方に影響を与えるものである。本学の叡智を結集して取り組む必要のある重要な作業である。

我々が真に守らなければならないのは、学問であり、高等教育であって、既存の組織の在り方ではない。そして、この決意を持つことが、学問の自由や大学の自治を守るためにも欠かせない前提なのである。

※「沢渡事件」や「滝川事件」などに代表される、戦前の京都帝国大学、戦後の京都大学を舞台とした事件の呼称



## 大学の動き

### 松本総長、三嶋理事・副学長、吉川理事・副学長、教職員一行が第3回日独6大学長会議に参加

9月12日(木)から13日(金)までの間、ゲッティンゲン大学(ドイツ・ゲッティンゲン)にて、第3回日独6大学長会議(以下、HeKKSaGOn学長会議)が開催され、松本 紘 総長、三嶋理晃 病院・国際担当理事・副学長、吉川 潔 研究担当理事・副学長をはじめ、本学から合計20名の教職員が参加した。

HeKKSaGOn(ヘキサゴン)<sup>(※)</sup>は、日独大学間の交流を推進することを目的に、ドイツ側からの呼びかけで平成22年に結成された二国間型のコンソーシアムで、日本側からは本学、大阪大学、東北大学、ドイツ側からはハイデルベルグ大学、ゲッティンゲン大学、カールスルーエ工科大学の計6大学が参加している。HeKKSaGOn学長会議は、これまで第1回をハイデルベルグ大学(ドイツ・ハイデルベルグ)、第2回を本学で開催してきた。本学は第2回開催より、日本側の幹事校を担っている(ドイツ側幹事校はハイデルベルグ大学)。

第3回HeKKSaGOn学長会議のテーマは「若手研究者の育成」で、6大学から約100名の参加があった。初日午後のウルリケ バイジーゲル ゲッティンゲン大学長および松本総長による開会の挨拶で開幕し、中根 猛 在ドイツ特命全権大使、ステファン ユンゲブロット 科学文化省高等教育局長、ヘルミ ベベハニ ゲッティンゲン市長、小平桂一 日本学術振興会(JSPS)ボンセンター長を迎えての挨拶があった。さらに、ステファン トゥルーエ ゲッティンゲン大学教授による基調講演の後、6大学の学長および副学長による各大学の若手研究者育成計画の紹介があり、本学からは三嶋理事・副学長が講演した。

2日目は、6大学の研究者による共同研究の促進および若手研究者・学生の育成の方策について議論し、新しい分野の研究セッションの設立、外部専門家の研究セッションへの招聘、共同研究成果の報告、サマースクールの継続的实施、外部資金の獲得などが決定された。

さらに、HeKKSaGOnコンソーシアムのロゴが新しく策定され、6大学の研究者間

の交流促進および広報のためウェブサイトを構築・公開することとなった。

その他、初日午前中にはゲッティンゲン大学のキャンパスツアーが開催され、研究セッションによっては、共同研究者が集まり、研究室や研究施設を訪問するなどした。2日目午前中には、パラレルセッションとして八つの研究セッションが設けられ、6大学から研究者が集まり、共同研究について議論した。

最終の全体会議では、学長会議で決定された内容が6大学の学長から研究者に報告された。研究者からは今後のHeKKSaGOnコンソーシアムに対する様々な要望や質問が投げかけられ、熱心な議論が繰り返された。

6大学長が共同声明書に署名をし、各大学長からの総括の挨拶をもってHeKKSaGOn学長会議は幕を閉じた。

また、この期間中に、松本総長とベルンハルト アイテル ハイデルベルグ大学長により、大学間学生交流協定の締結式が行われた。本学とハイデルベルグ大学のこれまでの大学間学生交流協定では、相互派遣できる学生数は毎年2名と規定されていたが、留学を希望する学生の増加に伴い、このたび派遣数を増加させた新たな学生交流協定を締結し、毎年5名の学生を派遣することが出来るようになった。

次回は、2015年春に東北大学で開催される予定である。



集合写真

※HeKKSaGOn(ヘキサゴン)とは、6大学が所在する都市(ハイデルベルグ大学-Heidelberg, 京都大学-Kyoto, カールスルーエ工科大学-Karlsruhe,

東北大学-Sendai, ゲッティンゲン大学-Göttingen, 大阪大学-Osaka)の頭文字を取ったもの。

(研究国際部)

## 京都大学春秋講義(平成25年度秋季講義)を開催

京都大学春秋講義は、京都大学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、1988(昭和63)年秋から開講している公開講座である。

今回は、メインテーマを「安心・安寧の社会を求めて」として、2日間にわたり、合わせて4名の講師が百周年時計台記念館において講義を行った。

1日目は9月21日(土)に、皆藤 章 教育学研究科教授の「こころの時代を生きる」、寶 馨 防災研究所教授の「地球温暖化, 情報化, 高齢化時代における防災・減災」、2日目は9月29日(日)に、諸富 徹 経済学研究科教授の「安定した経済社会における再生可能エネルギーの役割」、松林公蔵 東南アジア研究所教授の「豊かな老いを求めて-フィールド医学の現場から-」と題した講義であった。2日間で845名の参加があり、各講義後には活発な質疑応答が行われ大変盛り上がった。

参加者からは「自分なりの生き方や哲学を見直す



会場の様子

良い機会となった」、「超高齢社会の防災の在り方は現在と異なるタイプの対処が必要になるなど防災の難しさが良く分かった」、「地域でエネルギー政策にこれだけ力を入れているとは知らなかった」、「いかに死を迎えるかを考えさせられた」などの感想が寄せられた。

(渉外部)

## 京都大学と国連環境計画(UNEP)が学術交流協定を締結

10月11日(金)、本学と国連環境計画(UNEP)は、淡水管理を重点とした地球的環境課題に取り組む大学院生を教育サポートするための協力協定を締結した。締結式はホテル日航熊本において開催され、本学代表として森 純一国際交流推進機構長が出席した。UNEPとの人材交流を含む協力協定を結んでいる大学は世界的に限られており、我が国では初めてである。

本学は国連環境計画と過去10年間にわたって、地球規模、地域や国家規模の環境アセスメントを行い、その状況を国際報告書としてレポートする地球環境監視システム(GEMS)淡水部門(Water)に対して大学院生の派遣などを通じて貢献を行ってきた。

国連事務次長で、国連環境計画の事務局長である

アヒム・シュタイナー氏は、「環境教育は、21世紀における新たな挑戦の機会を知るための力を新しい世代のリーダーに与えるために極めて重要である」、「この協力協定締結により、国連環境計画と京都大学との、強く長期にわたる協力関係は更に強固なものとなるだろう。また、環境に関する研ぎすまされた知識を得た学生達によって、日本やその他の国々が、包括的なグリーン経済への移行の扉を押し開く可能性が高まるだろう」と期待を込めて述べた。

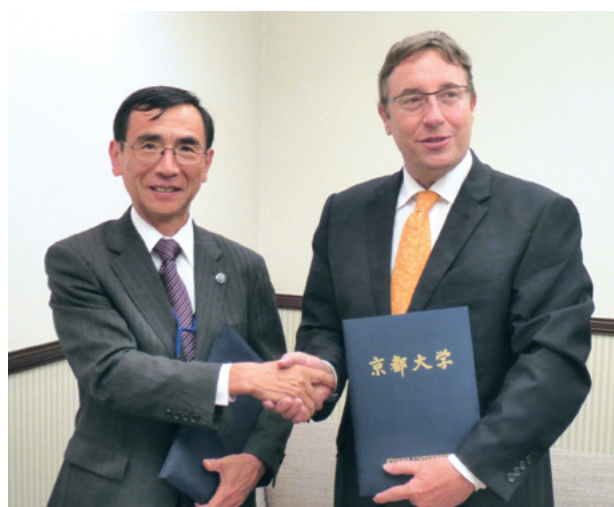
また、松本 紘総長は、「今回の協定締結は京都大学の環境分野における永年の国際貢献の成果であり、この協定に基づく人材交流により、本学学生の環境に対する意識・知識・実戦経験を高め、将来にわたり世界規模の環境計画に寄与できることを期待



する」とのメッセージをシュタイナー氏に伝えた。

本協力協定により、主に以下の分野における協力を推進する。

- ・地球、地域そして国家規模における淡水資源の環境アセスメント
- ・ミレニアム開発目標(MDG)、持続可能開発目標(SDG)、フューチャーアースなどにおける専門的知見の協力
- ・京都大学大学院総合生存学館(GSAIS)－思修館プログラム(SALS)、グローバル生存学(GSS)大学院連携プログラムなどの博士課程教育リーディングプログラムのインターンシップ(海外武者修行)の受入れや、講義実施などの人材交流の推進。



締結後に握手をする、森機構長(左)とシュタイナー事務局長(右)  
(研究国際部)

## 部局の動き

### 寄附講座・寄附研究部門の更新

10月1日に寄附研究部門が更新された。概要は以下のとおりである。

微生物科学寄附研究部門(更新)	
1. 名 称	微生物科学寄附研究部門 (Research Division of Microbial Sciences)
2. 寄 附 者	財団法人 発酵研究所
3. 寄附金額	更新にかかる寄附金なし
4. 設置期間	平成25年10月1日～平成26年3月31日(平成20年10月1日設置)
5. 担当教員	島 純 特定教授(寄附研究部門) 田中 晃一 特定准教授(寄附研究部門)
6. 研究目的	微生物科学研究の成果は、幅広い産業に波及している。このような微生物科学研究の広汎性を支えているのは、微生物機能の多様性である。本寄附研究部門では新たな発見を目指し、有用な微生物機能を多様性の中から探索することを基盤に、微生物機能の解析・応用を通して社会に貢献しうる独創的な新技術を開発することを目的とする。
7. 研究内容	循環型社会形成に資する環境保全技術などに有用な微生物機能の探索研究、ならびにその基盤となる微生物資源の収集・分類・保存に関する研究、さらには、探索により得られた微生物機能の解析・応用開発に関する研究・教育を実施する。
8. 研究課題	「新規微生物機能の探索を基盤とした環境保全技術の開発」を中心とした微生物科学研究に取り組む。すなわち、有用物質生産のためのバイオプロセス開発、エネルギー生産、環境浄化などに有用な微生物機能の探索・開発を基盤に、新しい発見を目指した独創的な研究を行う。また、これらの研究開発の過程を通じて微生物学教育を支援することにより、次世代の微生物研究者の育成を図る。さらに、本学の関連研究科等には微生物学研究を行っている研究室が複数あり、これらと本寄附研究部門が共同研究や情報交換を行うことにより、本学の微生物科学研究のさらなる進展に寄与する。

(研究国際部)

## 基礎物理学研究所創立60周年記念シンポジウム・講演会・式典・祝賀会を挙行

基礎物理学研究所は創立60周年を記念して、9月18日(水)と19日(木)に、湯川記念館パナソニック国際交流ホールにおいてシンポジウム、講演会および式典、ならびに百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて祝賀会を、学内外関係者約120名の参加を得て開催した。

記念講演会では、元基礎物理学研究所長の益川敏英名誉教授が「共同利用研と私」の演題で、自ら見てきた基礎物理学研究所の歴史、湯川秀樹博士との接点であった混沌会(当時定期的に行われていた、湯川博士をかこむ勉強会)でのエピソードを披露、基礎研究、共同研究および研究交流の重要性について講演した。

記念式典では、佐々木節 基礎物理学研究所長が式辞の中で、創設から現在までの発展の経緯を述べるとともに、所員一同一層研究に邁進する覚悟であることを披露した。また、松本 紘総長(西阪 昇 理事・副学長代読)が挨拶の中で、我が国で初の全国共同利用研究所として発足した当時から現在までの経緯と基礎研究の重要性を述べた。引き続き、木村直樹 文部科学省研究振興局学術機関課長(瀬戸信太郎 同学術研究調整官代読)、大西 隆 日本学術会議会長、佐藤勝彦 大学共同利用機関法人自然科学研究機構長、村山 斉 東京大学国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構長(大栗博司 同主任研究員代読)、森 重文 数理解析研究所長が来賓祝辞を述べた。

式典終了後、祝賀会が開催され、佐々木所長の挨



講演をする益川名誉教授



式辞を述べる佐々木所長



祝賀会の様子

拶、佐藤文隆元所長のスピーチならびに発声で乾杯した。参加者の和やかな歓談のなか、瀧川 仁東京大学物性研究所長、福山秀俊 東京理科大学副学長、國廣悌二 理学研究科教授、九後太一 前基礎物理学研究所長のスピーチがあり、創設時代からそれぞれ研究所に関わられた時代の苦労話や、次の世代へさらなる研究の進展を望む声など、盛況のうちに幕を閉じた。



湯川記念館前にて集合写真

(基礎物理学研究所)



## 寸言

## ウルトラトレイルという世界

原 良和

ランニングは浪人2年目の夏から始めました。大学入学後は1回生の時から全学の陸上競技部に所属し、毎日練習に明け暮れていました。諸先輩方にご指導いただき、3回生前半までは面白いように記録も伸び、対抗戦にも出場しました。フルマラソンは在学中に1回だけ走り、第2回淀川市民マラソンを2時間36分で走っています。



卒業後は勤務医になりましたので研修医時代は当直も多く、週末しか走れませんでした。卒業後6～7年もたち、自分の時間が少しずつとれるようになると、週末だけでなく、平日も通勤ランという形で走る距離を伸ばしていきました。

目標は、福岡国際マラソンやびわ湖毎日マラソンといった参加資格が厳密に区切られる大会に出場することでした。が、2時間30分を切るには1kmあたり3分35秒程度のスピードが必要で、私には厳しく、これまで6回しか記録したことがありません。30歳も後半となり、フルマラソンのタイムが伸びなくなった頃、ウルトラマラソンに挑戦しようと思い始めました。

初挑戦は2009年の5月3日、「武庫川ユリカモメウルトラ70kmマラソン」。45kmくらいまではこれまでの経験で走れましたが、案の定50kmから失速。洗礼を浴びました。翌年2010年も同じユリカモメウルトラ70kmマラソンに再挑戦。補給に気をつけ4時間40分、当時の大会記録で優勝。6月のサロマ湖ウルトラ100kmマラソンも自信を持って臨み、結果6時間48分で4位入賞。100kmマラソン世界大会の代表切符をゲットしました。

初の世界大会はイギリス領ジブラルタルで、海峡の町一周5kmほどを20周します。十分な練習をして臨みましたが、後半失速し13位に終わりました。しかし、チームメイトが優勝し、日本男子チームは国別対抗戦で優勝したので最高の大会になりました。

翌年以降も冬にフルマラソン、春から秋に100kmというスケジュールでしたが、練習の一環として六甲山での練習を月に1回ペースでこなすようになりました。

山野を走るトレイルの初レースは2010年4月のハセツネ30K(日本山岳耐久レース(ハセツネCUP)の

入門大会)でした。登りのペースはついて行けましたが、皆さん下りが速いこと速いこと。全く対応できず、自分は転倒し撃沈しました。

2012年4月には3回目の100km世界大会に出ました。イタリアのセレーノというミラノ近郊の町でしたが、コンディションをうまくあわせられず途中棄権に終わり、失意のレースで自信を完全に喪失してしまいました。その年のGWから、がむしゃらに練習に取り組みました。4連休のうち30km走を3回、六甲山を1回という練習をこなし、5月に星の郷八ヶ岳野辺山高原100kmウルトラマラソンで大会新記録で圧勝。野辺山高原といえばアップダウンが厳しいことで有名です。「平地よりアップダウンが厳しいほうが自分に向いているかもしれない、ウルトラトレイルはどうだろう」。世界的に有名なウルトラトレイルデュモンブラン(UTMB)を意識し始めた瞬間でした。

その後半年ほどでUTMBのエントリーに必要な7ポイントを集め、半年で100kmクラスのレース5本連続優勝という、かつて誰もしたことのないことを成し遂げました。

2013年4月にはUTMBに向けての予行演習のつもりでウルトラトレイルマウントフジ(UTMF)<sup>\*</sup>に出場しました。100マイルレースは初めて。どんな練習をすれば良いのかよくわからず、手探りで夜間走の練習もしました。うまく練習、調整でき、絶好調の状態で当日を迎えました。天候も快晴で満月でした。夜中も月明かりで雪をかぶった富士山がきれいに見え、幻想的な景色でした。161kmというとてもない距離ですが、80km手前で先頭へ。怖いもの知らずにペースアップして、夜中から明け方までは応援の方々の反応を楽しむ余裕もありました。しかし130km以降は地獄の苦しみでした。登りを上れなくなり、体があちこち悲鳴を上げます。「まだ先頭だから頑張ろう、次のエイドまで頑張ろう」。沿道の皆さんの声援に元気をもらい、なんとか先頭をキープして河口湖畔のゴールテープに飛び込みました。

UTMF後はかつて経験したことのない疲労、故障に悩まされました。故障が完治しないまま練習し、8月のUTMBは途中棄権でした。しかし2014年にはUltra-Trail World Tourが始まります。<http://www.ultratrailworldtour.com/> そのうちの3～4レースに出場します。応援よろしくお願いします。

※ウルトラトレイルマウントフジ(UTMF)2013年度大会

距離約161km、累積標高差9000m、参加者は世界中から991名

(はら よしかず 兵庫県立塚口病院内科医長、UTMF2013年度大会優勝者、平成11年医学部卒業)

## 随想

## 白昼夢

名誉教授 河合 隆裕



高校時代、歴史は苦手科目だった。理科や数学の試験の前日は睡眠を十分に取ることさえ考えれば良かったが、歴史の場合はそうも行かなかったからである。そんな私が昭和戦前期の日本史、またそれと比較しての日清・日露の戦さに興味を持つようになったきっかけは、30才前後の2年間をバークレーで過ごし、「どうしてこんなすごい国を相手に日本は戦争を始めたのだろう」とつくづく思ったことであろう。それに加えて、父を早くに亡くした私にとって父代わりだった祖父が昭和戦前期の歴史に興味を持ち、その時代の人々の人物月旦が帰省時の雑談によく出て来たからであろう。確かめたことはないけれど、戦時中英語教師として不快なことが多かったであろう祖父だけに「どうしてあんなことに…」との思いは強かったのであろうと思う。そんな祖父が晩年常に手許に置いていたのは、阿川弘之氏の「米内光政」だった。したがって私も阿川氏の作品に親しむようになり、また、昭和と比較しての明治の様子にも司馬遼太郎「坂の上の雲」、江藤 淳「海は甦える」等を通じて興味を持つようになった。そして今や自分を元気づけたい時は「坂の上の雲」の信濃丸の状況を、気分を引き締めたい時は「海は甦える」の「伊藤博文、金子堅太郎説得の場面」を、そして物事をじっくりと考えたい時は「米内光政」冒頭の名文を、各々覗いてみる、とまあパターンが決まってしまう程にこれ等に馴れ親しむようになってしまった。

こんな次第で私の「歴史への興味」は所詮「歴史小説好み」、したがって行きつく所は床屋政談的白昼夢となる。例えば――

昭和16年10月の海軍首脳部が次の布陣なら、太平洋戦争が昭和16年12月に始まることは無かつたろう、と云う類のものである；堀悌吉海相、山本五十六次官、井上成美軍務局長、米内光政軍令部総長、新見

政一軍令部次長、吉田善吾連合艦隊司令長官、そして横須賀鎮守府司令長官に豊田副武提督。

軍部大臣現役制一つから見ても、勿論夢物語に過ぎないが、こんな「ドリームチーム」なら大丈夫、と思われる方は多いだろう。(実際、対米英戦を食い止める最後の努力として山本海相・米内総長案が一部で考えられていたことは間違いのないようである。例によって伏見宮元帥の所で止まったようではあるが。)この布陣なら<sup>たとい</sup>仮令一人一殺テロで堀海相を亡き者にしても海軍首脳の見解は微塵も揺るがないだろうから、その考えをつぶすには陸軍のクーデタ位しか方法がなく、そうなれば、昭和20年8月の言動に多少怪し気な所があるにもせよ、陸軍嫌いで有名な豊田提督、直ちに芝浦沖辺に鎮守府所属の警備艦を回航して市ヶ谷台に向けて大砲を打つ放す位はされたり、同期生2人を殺された吉田提督麾下の連合艦隊主力もその支援の為に全速力で東京湾に向かったことであろう。こうなったらもう対米英戦など「当分は」出来なくなろう、と思いたくなる。だが、いつもこの後の「白昼夢第2部」に悩まされる：昭和17年末の新聞を見ると「対米英戦がやはり始まっている！」こんな気分になる理由は簡単で、所謂「大角人事」によって、時代の「天の声民の声」に盲従することなく「日本海軍は米英を向うにまわして戦争するように建造されておりません。」(昭和14年8月8日の米内海相(当時)の言)と言い得る現役将官が海軍には余り残っていなかったと思われるからである。誤った「人事」が10年後の組織の進路を狂わせ、そしてこの場合は国家の命運をも左右した顕著な一例とも言えよう。

多分大学の運命は、人間以外に頼るものが無い度合が軍より大きいだけに、より大きく「人事」に左右されると思う。「世の評判」と云った他人の判断とか「数値比較」と云った一次元思考でなく、自分の頭で起こり得る可能性を出来る限り比較検討して人事を行う、と云う京都大学の伝統が今後も守られて行くことを祈っている。

(かわい たかひろ 平成20年退職 元数理解析研究所教授 専門は代数解析学)

## 洛書

## 「押さば押せ、引かば押せ」

鈴木 実

「押さば押せ、引かば押せ」、私が医学部の学生時代の6年間を過ごした京都大学体育会相撲部に伝わる言葉です。相撲はとにかく押し相撲が基本であるとの教えです。私は今年の5月から教授として研究室を運営する立場となりました。まだその気負いもある時期に本「洛書」執筆の機会を頂いたこともあり、本稿のタイトルにいたしました。



相撲部時代の思い出(自慢話?)を一つだけ披露いたします。4回生の時、日本学生相撲連盟が毎年行っているハワイ遠征に参加いたしました。日本の遠征団は、日大、近大などの東西強豪校の180 cm, 100 kg以上の選手が中心でした。同様の体格の方が大勢いるハワイ現地でも、我々が団体で行動していると大きさが目をひくようで、「スモウレスラー!」と所々で声をかけられ写真を撮られました。その日本遠征団の中で165 cm, 75 kgであった私は、さながら豆力士のような存在でした。移動の飛行機の座席は当然エコノミー席でしたので、小柄な私が隣に座ると、大柄な皆から大歓迎を受けました。

さて遠征のメインイベントは、現地の相撲クラブとの対抗戦でした。対抗戦が始まると、現地の選手も100 kg以上の立派な体格の選手がほとんどで、豆力士の私が土俵に上がると、対戦相手は私よりふた回りほども大きく見えました。観覧の人達も、おそらく日本の遠征団も私の敗戦を予想していたと思うのですが、いざ組み合うと上手投げか下手投げか忘れましたが、相手を豪快に投げ飛ばして勝つことができました。まさかの展開で、会場の大喝采を頂き、勝ち名乗りをうけ、興奮冷めやらぬまま土俵下に降りると、日本の選手達からも手荒い祝福をうけました。その夜の日本遠征団のパーティで、対抗戦に負けた数人の選手に対して、体育会の乗りの、この紙面にはとうてい書けない罰ゲームがありましたので、本当に勝ってよかったと胸をなで下ろしたのを覚えて

ています。

さてタイトルであります「押さば押せ、引かば押せ」ですが、私の研究室のモットーにもしようかと思っております。私は放射線腫瘍医であり、私の研究室は、ホウ素中性子捕捉療法(Boron neutron capture therapy, 以下BNCT)という中性子を用いた癌の放射線治療を研究しております。昨年(2012年10月)から、加速器(サイクロトロン)を中性子源とするBNCTの治験が開始され、多くの関係者のご努力により、将来的には癌基幹病院クラスでのBNCT実施が可能となる第1歩を踏み出しております。自然科学の真理を解き明かす基礎研究においては、押し相撲一本ではなく、時には引いて研究の大局をみる必要があるかもしれません。しかし、癌治療に関しての研究のベクトルは、常に前進あるのみです。当面、BNCT研究のベクトルが向かうべきゴールはシンプルで、「加速器BNCTを用いて、多くの癌患者に有効であるBNCTの治療機会を提供する」ということです。そのためには、医学のみならず薬理学、ホウ素化学、加速器工学など、多くの研究分野の方々に、BNCTの臨床、基礎研究にご参入いただき、独自のアプローチからBNCT研究を進めてもらう必要があります。その結果、全体としてBNCT研究のベクトルは常にゴールに向かって前進していくことが可能となります。本稿を読まれ、「BNCTとは何ぞや?」と思われた方々、是非、原子炉実験所のHPをご覧ください。

本年度から相撲部部長を引き継ぎ、久しぶりに、学生相撲の大会へ応援に行きますと、東大相撲部部長(文学部教授)にお会いしました。東大相撲部OBで、私より10歳くらい年上の方ですが、なんと今でも土俵に上がって部員に稽古をつけているとのこと、「鈴木君、まだ若いのだから土俵に上がって胸を出さなければダメだよ」と言われました。その言葉に発奮して、自宅から実験所までの通勤を、車からwalking(40分くらい)に切り替え、体力作りを始めました。しかし、この体力作りばかりは「押さば押せ、引かば引け」と、何かと理由をつけては、さぼる日々が多く成果も足踏み状態…悩んでおります。

(すずき みのる 原子炉実験所・粒子線腫瘍学研究センター教授、専門はホウ素中性子捕捉療法)



## 話題

## 総合博物館がベトナム・ハノイで国際シンポジウムを開催

9月13日(金)から15日(日)まで、総合博物館は、第3回東アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム(Third International Symposium on East Asian Vertebrate Species Diversity)を、ベトナム・ハノイのベトナム科学技術院(Vietnam Academy of Science and Technology)において、ベトナム科学技術院生態生物資源研究所、同ベトナム国立自然博物館と共同で開催した。このシンポジウムは、本学総合博物館が拠点機関として推進している日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業「東アジア脊椎動物種多様性研究基盤と標本ネットワーク形成」プロジェクトの一環として行われたものである。プロジェクトに参画する日本、ベトナム、韓国、中国に加え、ロシア、フィリピン、カンボジア、インドネシアの計8ヶ国から88名の研究者が参加し、計69演題の研究発表をもとに活発な議論と学術交流が行われた。

開会式では、Le Xuan Canh生態生物資源研究所長、Nguyen Gia Lapベトナム科学技術院国際協力部副部長、Lee Hangソウル国立大学教授が挨拶をし、シンポジウムがアジア脊椎動物研究者の交流とネットワーク形成に大きく寄与することへの期待が述べられた。

特別講演として、13日(金)にはNguyen Xuan Dang生態生物資源研究所脊椎動物研究部長がベトナムでの哺乳類多様性の研究の現状や今後の展望について紹介した。また、14日(土)には本川雅治総合博物館准教授がアジア・アフリカ学術基盤形成事業の2年半の活発な活動を紹介し、新しい形の標本ネットワークのあり方について提案した。アジア視点による、研究者・博物館・大学のネットワークを基礎にして、若手研究者の育成をはかりながら持続的な標本ネットワーク形成を展開することの重要性が強調された。また、標本をもとにし



シンポジウム会場風景

た研究活動を重要なミッションに掲げ、プロジェクトの拠点機関である総合博物館が、研究とコレクションを軸にしてアジアで主導的な役割を果たす意義についても議論した。

また、口頭発表とポスター発表から、ソウル国立大学のLee Seojin博士課程大学院生、中国科学院成都生物研究所のZhang Jing博士課程大学院生、生態生物資源研究所のBui Tuan Hai研究生、ハノイ国家大学自然科学大学のLe Duc Minh研究生、インドネシア科学院ボゴール動物学博物館のAmir Hamidy研究員、プノンペン王立大学のSophany Phauk講師が優秀発表賞に選ばれ、選考委員会のNguyen研究部長と正田 努理学研究科教授から賞状と副賞の関連書籍が閉会式において授与された。押田龍夫帯広畜産大学教授の司会で進



優秀発表賞の授賞式

められた閉会式では、主催者を代表して本川准教授、プロジェクト参加国以外からの参加者を代表してAmir研究員、プロジェクト参加国を代表してLi Yuchun山東大学教授が挨拶し、拠点形成プログラムが順調に進んでいること、引き続き総合博物館が主導してアジアの研究者と標本コレクションのネットワーク研究拠点形成をさらに推進していくことが確認された。

シンポジウムの後に行われた懇親会においても、参加者が国境を越えて活発な交流を行った。Nguyen研究部長、大野照文総合博物館長の挨拶では、将来に向けたアジア研究者のさらなる挑戦の必要性が強調された。また、各国からの若手研究者代表が壇上で挨拶をし、次世代が着実に育成されていることを確認する場にもなった。

15日(日)には標本ネットワークの形成を目指して、1926年に設立された、インドシナ半島で最古のハノイ国家大学自然科学大学の動物学博物館を見学した。それぞれの標本が、バックグラウンドにある大

学研究者と研究活動に裏付けられた重要なものであることを認識することができ、大学博物館にとって標本と研究がその活動の原点にあることを再確認す

る機会ともなった。

(総合博物館)

## 日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第1回シンポジウムを開催

9月16日(月・祝)、ベトナム・ホイアン市において、日本学術振興会研究拠点形成事業「インドシナ地域における地球環境学連携拠点の形成」第1回シンポジウムを開催した。

本プログラムは、近年急激な変容を遂げるインドシナ地域の環境問題解決のため、学際的・国際的協働体制を確立することを目的に、地球環境学・学舎が平成25年度より3年間実施するもので、これまで緊密な連携をしてきたベトナムのハノイ理工大学、フエ大学、ダナン工科大学をハブ拠点とし、インドシナ広域のタイ・コンケン大学、ラオス・チャンパサク大学、カンボジア・王立農業大学を準ハブ拠点としている。

今後、インドシナ地域に共通する環境問題をテーマに実践的な共同研究の展開、セミナー等の研究者交流の促進、地球環境学連携の情報基盤の整備を順次進めていく予定である。

初年度となる今回のシンポジウムには、本学、拠点大学の教員、学生、および本プログラムに関心を表明したインドシナ地域や日本の大学関係者、日本企業関係者などを含め、約100名が参加した。

シンポジウムでは、まず今回の主催である本学、フエ大学を代表して、藤井滋穂 地球環境学・学舎長、Le Van An フエ農林大学副学長より歓迎の挨拶がおこなわれた。その後、藤井学舎長より本プログラムの主旨説明、およびこれまで地球環境学・学舎がベトナムで蓄積してきた教育研究成果が紹介され、各拠点大学からは今後の学際的・国際的連携についての抱負が述べられた。

午後には、「教育連携」、「都市域」、「沿岸域」、「農村域」、「山間域」の地域・テーマ別にグループディスカッションをおこない、社会的課題やその解決方法について熱心に議論が交わされ、グループ発表により全体の意見交換が交わされた。ポスター発表においても50以上の応募があり、インドシナ地域の環境問題に対する関心の高さが見られた。

本プログラムは、毎年1回の全体シンポジウムを企図しており、平成26年度はハノイ理工大学、同27年度はダナン工科大学との共同主催で共同研究の促進、教育連携の実現化など逐次議論していく予定で、今後の連携発展が期待できる。



シンポジウムの様子



グループディスカッションの様子

(地球環境学・学舎)



## 花山天文台特別公開ウィークと野外コンサートを実施

平成25年1月に、理学研究科附属施設の花山天文台が、京都市より「京都市民が残したいと思う京都を彩る建物や庭園」に選ばれた(京大広報2013年3月号参照)ことを記念し、9月16日(月・祝)から20日(金)まで花山天文台を公開した(特別公開ウィーク)。22日(日)にはそのフィナーレとして、音楽家の喜多郎氏を招いて野外コンサートを開いた。いずれも花山天文台の84年にわたる長い歴史の中で初めての試みであった。

初日の16日(月・祝)は台風18号の影響により、残念ながら中止せざるを得なかったが、その後の一週間は秋晴れが続き、絶好の見学・天体観望日和となった。17日(火)から20日(金)までの午前中には、京都市教育委員会の協力により、京都市内の小学校9校、生徒総数600人が花山天文台に見学に訪れ、太陽ライブ観望など楽しんだ。また特筆すべきことに、このとき、ボランティア参加として京都市立堀川高等学校の生徒が小学生を引率した。午後から夜には、



花山天文台本館ドームと柴田天文台長挨拶



喜多郎氏による演奏風景

一般の市民の方々が総数200人ほど訪れ、施設見学、ミニ講演(伊藤和行 文学研究科教授, 前田啓一 理学研究科准教授, 松尾太郎 同特定准教授, 栗田光樹夫 同准教授), 4D宇宙シアター, 45cm屈折望遠鏡による月観望などの企画を楽しんだ。

またこのとき、京都の芸術系大学との連携で、宇宙映像などをヒントにした芸術作品の展示企画「ギャラリーウィーク」も天文台を展示会場として開催した。

最終日の22日(日)の野外コンサートでは、中秋の名月を観ながら、約300人の参加者が、喜多郎氏夫妻による素晴らしい演奏を楽しんだ。コンサートのはじめに、柴田一成花山天文台長が開催の経緯を説明するとともに、花山天文台の将来構想(宇宙科学館+野外音楽堂構想)を紹介し、また、門川大作京都市長から心温まる祝辞をいただいた。



祝辞を述べる京都市門川市長

コンサートの最後、喜多郎氏がたて笛を吹き始めたときに月を覆っていたうす雲が、素晴らしい笛の音とともに次第に晴れ上がっていく様子は、まさに感動的なシーンであった。

(大学院理学研究科)



## 平成25年度総長杯(卓球大会)を開催

9月26日(木)総合体育館(地下1階卓球場)において、平成25年度総長杯(卓球大会)が行われた。13チーム98名のエントリーがあり、松本 紘 総長も選手として参加されるなか、各チーム優勝を目指し終始熱戦が繰り広げられた。

当日は秋の訪れを感じる涼しい気候であったが、同僚の応援等、場内はたいへんな盛り上がりを見せ、一球一球に大きな歓声が上がった。

午後8時から行われた決勝戦では、物質－細胞統合システム拠点・学務部の「Team07050840(代表者：菅原佐知子)」が、宇治地区事務部・エネルギー理工学研究所・産官学連携本部の「宇治連合(代表者：治岡淳一郎)」を2対1で下し、見事優勝した。試合終



試合で汗を流す松本総長(右)

了後の表彰式では、清水 尚 福利厚生室長より優勝杯、表彰状、賞品が授与された。



優勝したTeam07050840



準優勝した宇治連合チーム

(総務部)

## 「アジア太平洋における男女共同参画推進官・リーダーセミナー」(国立女性教育会館)一行が女性研究者支援センターを視察

国立女性教育会館は、開発途上国において男女共同参画の政策策定・政策提言を行う立場にある女性行政・教育担当者、NGOリーダーを対象に、女性の能力開発を目的として研修を行っている。平成25年度は、カンボジア、モンゴル、フィリピン、タイ、ベトナムから9名の女性リーダーが来日し、東京・京都で研修を行った。京都での研修は、女性研究者

支援センターが受け入れ、10月1日(火)に同センターを視察された。はじめに、伊藤公雄 同センター推進室長をコーディネーターとして「日本の若い世代にとっての男女共同参画」のセミナーを実施した。

次に施設の見学を行い、犬塚典子 同センター特定教授が、女性研究者支援の取組みについて概要を

説明した。同センターの待機乳児保育室や「グリーン・カーテン」の取組みなどについて質問が飛び交



犬塚特定教授による概要説明

い、関心の高さが伺えた。



集合写真

(女性研究者支援センター)

## 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター公開講座「成人生活への子ども時代の経験の影響」を開催

教育学研究科では、臨床教育実践研究センターにおいて、毎年深刻化する教育問題への取り組みの一環として、現代人のこころの理解に主眼をおいた公開講座を開催している。

ゲスト シュルマン

今年度は、Gustav Schulman同センター客員教授を講師として、10月6日(日)の午後1時から、百周年時計台記念館国際交流ホールⅢで開催し、心理臨床家や医師、教育関係者、学生など約60名の参加があった。

講演では初めに、様々な実証的データを参照しながら、虐待をはじめとした子ども時代のトラウマの体験が、成人してからの生活にどのような影響を及ぼすのか、また精神病理といかに関連するのかについて語られた。さらに、臨床例を交えながら、トラウマの体験が基底にある患者に対して、どのような治療がなされるか、また、トラウマの世代間伝達を防ぐために幼児期の育児において重要となる点についても語られた。指定討論においては、精神分析をはじめとする心理療法における具体的ななかかわり方について、より詳細に語られた。精神分析実践の経験豊富な講師の語り口に接した参加者からは、「幼児期のトラウマ体験が成人期まで影響する可能性が



講師の話に熱心に聴く受講者

あることに、その時期の養育の大切さを改めて感じた」、「トラウマを抱えている人を支援するうえで大事なポイントを知ることができたので、今後の支援に活かしていきたい」などの感想が寄せられ、貴重な機会となった。

本講座は例年参加者から大変好評を得ており、現代社会の複雑なこころの問題を理解するための視点を一般市民に向けて広く提供できる場となるよう、来年度以降も引き続き開催していくことを考えている。

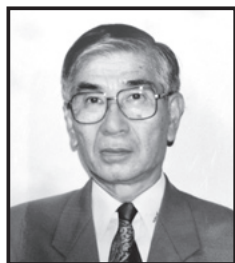
(大学院教育学研究科)



## 訃報

このたび、川合英夫<sup>かわい ひでお</sup>名誉教授、池田善郎<sup>いけ だよしろう</sup>名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

## 川合 英夫 名誉教授



川合英夫先生は、9月17日逝去された。享年86。

先生は、昭和25年京都大学理学部地球物理学科を卒業後、水産庁東海区水産研究所、南海区水産研究所、南西海区水産研究所、日本海区水産研究所にて様々な職務を歴任され、同46年京都大学農学部水産学科助教授を経て、同50年同教授に就任、水産物理学講座を担当された。平成3年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、本学の防火委員長、同大学共通第一次学力試験連絡協議会委員、学生懇話委員会委員や東京大学海洋研究所協議委員として自他大学管理運営での重責を全うされるとともに、本学理学部や北海道大学水産学部、東北

大学理学部、山梨大学教育学部、高知大学農学部、鹿児島大学水産学部、近畿大学農学部、京都産業大学など、他学部や他大学での非常勤講師をつとめ、多種多様な人材の教育に貢献された。

先生は海洋物理学に基づく水産海洋学に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されるとともに、黒潮と親潮の影響を受ける海域での物理構造と漁場形成についての研究で顕著な業績をあげられた。

本学退官後は、様々な歴史的文献をもとに、人間が黒潮にどのように遭遇し、またそれをどう認識してきたかについての研究を展開され多数の業績を残された。

(大学院農学研究科)

## 池田 善郎 名誉教授



池田善郎先生は、9月23日逝去された。享年72。

先生は昭和39年京都大学農学部農業工学科を卒業し、株式会社藤井製作所に入社後、同40年9月同大学農学部助手、同47年10月同講師、同50年11月同助教授を経て、平成2年4月同教授に就任し、農産加工機械学講座を担当された。(その後、平成7年農産加工学分野に改組)平成17年定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は永年にわたって農業機械学および農産加工学の分野において、知能化、ロボット化を提唱されるとともに、家畜の精密管理等の研究において優れ

た業績を残された。中でもコンバインの自動化、果実をハンドリングするロボットの人工触覚に関する研究、農産物の光学的特性、音響特性、粘弾性、振動特性等の物理的特性を生かした農産加工機械の知能化に関する研究、家畜の音声および画像情報による個体識別等に多くの業績を挙げられ、その発展に寄与された。

また、農業機械学会の理事、支部長等の要職を歴任されると同時に、韓国、台湾、日本の学術交流に貢献された。その功績がたたえられ、平成22年11月には台湾農業機械学会(CIAM)から国際貢献賞を授与された。

(大学院農学研究科)